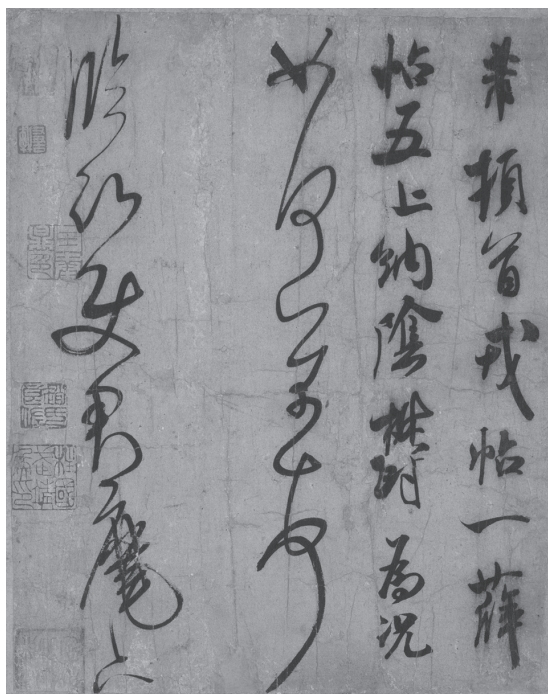


宋・米芾 リんぎしくんじょう
《臨沂使君帖》

宋の米芾は行書において伝統を踏まえた独自の新表現を作り上げた人物である。彼の天才的な能書力は他の書体においても発揮された。そのことを伝える遺品も現存している。ここでは連綿体による草書の手紙の一種、といっ



ても、前半二行は行書、後半二行は連綿草、という誠に不可思議な書式の手紙を紹介しよう。わずか四行二十六字の《臨沂使君帖》がそれである。

見ての通り、この手紙の書き方は尋常でない。初めの二行が行書、そして、どういうわけか突然のギアチェンジがあり、三行目から四行目にかけては、スピード感満点の連綿の草書で一気に呵成に筆を運んでいる。しか

も、この二行の行間が異様に広い。

この一枚の紙の上で繰り広げられた米芾の演技には驚かされる。展覧会などなかった時代に、書を得意とする人物が、特定の相手に力量を見せつけるための、小さな舞台での大きな演技である。

米芾は晋の王献之が連綿草で書いた〈十二月帖〉を所蔵していた。そして、彼自身の著『書史』にも、「この帖の運筆、火筋（火箸のこと）にて灰に画するが如し。連属して端末無く、意を経ざるが如し。所謂一筆書にして、天下の子敬第一の書。」とある。王献之の〈十二月帖〉に見られる「一筆書」が、この奇抜な連綿書につながっていることは間違いない。

この種の書法は、後の明代の名手たちに継承され、長条幅という米芾の時代にはなかった揮毫様式の中で、更なる進展を見せることになる。それはそれとして、米芾がこんな連綿草を書いていたのなら、この種の書法を駆使して、詩なり文なりを揮毫した横巻の作品を、数多く書き遺してほしかったと思う。

この帖は文中の一語にちなんで〈陰鬱帖〉と呼ばれることもある。縦約三十一センチ、横約二十五センチ。台北の国立故宫博物院が収蔵する数ある米芾の作品のうちの一種で、榮宝齋『中国書法全集』卷三十八「米芾（二）」の巻頭にカラーで収載されている。「芾 頓首 戎帖一、薛帖五、上納す。陰鬱、況を為すこと如何。芾 頓首。臨沂使君麾下。」つまり「臨沂使君」なる人物（未詳）に対して、「王戎の帖一種と薛稷の帖五種をお贈りします。陰鬱な時節、いかがお過ごしで

すか。」という内容。

宛名に「麾下（閣下の意）」の語を添えた手紙で、相手を尊敬するための書式として「如何」の二字を紙の最上部に置くことは計算していたであろう。しかし、この二字から全く別人のように書風を変えた米芾の心理状況は不明というほかない。冴え冴えとした運筆の妙技を見せつける一人二役の演技である。これを受け取った人物は、いかにも変わり者の米芾らしいと、笑みをたたえたかもしれない。